



笑談貧乏神屋記
きんぎょんひんぷくごんき

福
 中

福中

遠 18
 1897
 2



3
1897
2

笑談貧福軍記初編卷之中

浪華 一荷堂半水戲編

二回 二神術と授て貧福の戦と見とる

新て貧神へ又貧助より向ひ嘆ふして志地をふと。

そき貧乞とりの内へ喻今日も追るとも未と入る

道よりて世の附合はることを今ん食と落とる

非人と号て人は非をたあまバ現世も産るのいふ

のくして歲月此家の表徴を守護せし切る西



Vertical text on the left margin, likely a library or collection stamp.

く。非人の影計へ没さんこと。看るふ悉むあむら
 の。此押入の中より出かく。貪体を現して。安みこり
 意を告るるりと。怪贖る聲をり立て。らむさ
 くる。した神託よ。貪助るうて。自根とよせ。あひのめ
 寄ぬ出現よ。親ふ受つぐ。貪乏の始末。をトめて
 さら。く。豆のつた。昔身上の。その歳月。の。形没るも
 神の命助まらる。み。又。昂日。昂今。こ。腹中。む。む。く
 む。と。食物。ある。何。を。賣。へ。と。糶。具。も。め。く。玉。風。ん

ん。尽。た。て。翌。日。は。食。へ。と。手。後。も。あ。し。次。ぎ。は。腹。の
 減。ま。ふ。一。椀。あり。と。も。り。の。歩。行。その。日。を。過。ん。と。思
 一。ふ。不。思。義。と。止。め。ま。ひ。一。う。へ。吉。う。き。ぬ。う。を。の。こ
 る。ま。へ。通。力。自。在。に。得。た。あ。へ。一。非。人。と。あ。る。と。は。徒
 む。て。腹。を。肥。ら。ま。と。と。あ。り。や。但。一。の。ふ。く。で。も。授。た。あ。り。
 福。神。あ。く。び。た。も。る。ま。す。何。等。の。術。一。前。に。
 さ。と。ひ。く。る。め。と。問。え。せ。ば。貪。乏。神。の。慈。願。と。い。は。る。
 所。理。論。を。り。我。え。一。く。も。此。屋。を。寓。と。る。せ。一

恩義もあつ。且亦貧兵傍のこぢりも今貧助も
 其のごとく。貧乏の底より出るなり。彼是とも子
 吾ためや。うちきとてあつた者あつねが。おろく秘しる
 貧術を今より汝も授へ。まづ其術と入る。不
 食貧樂と入る奇術ありて。うまき食を喰とと
 くと腹中をあしくするをかたむと。翌日のたくと入
 ありと入るとも。今日苦勞と入るとも。當座
 暮らら。安然と浮世をこころ其入。又其入。

めく。諂ふことあつ。礼義氣がよきまじらば。て嚴冬
 寒さ夜も布子あつても。是とふせぐ待ことあつて
 たのしみある。自由自在の貧術あり。とあるは傳授の
 外ありと。破團扇をこころとへ。是とありて。二回
 おひげは其身のあつて。飛歩行。節季晦日ののけ
 諸。留主つらふと。世のらざ。虚空をのぞく。たを
 ち。一。奇と妙との貧術をき。夢くらう。こまこ
 ありき。破色うち。は。一。せ。貧助。

いさこを返送二面よこせと受とりお一載て感わい
 る一ゴハありがごと神あま。うる奇術をさづけ
 たあふり。アラ難有ことと頼み貧乏感謝しれば貧
 乏神の笑さふくも。その破團扇をさづけ一あらひ。
 おこあらうこめて聞さる條あり。兼て汝も知りつん。
 近來福者の奴等をみるふ。利を貪りて人をさすあ。
 たぬころ黄金を借らんとし。命を代る大切の印
 草むりまで倦たらざど。家財諸道具貸し取あす。

其うへ利且と高く貸つ子。是をせさけて榮花を
 慮り。造作並日詰を立流さつく。衣類調度小
 羨麗を飾り。翫水遊山は樂むこと誰が蔭して
 るまどべたや。皆あき世界は貧乏あるゆへこそ
 斯やぞふ。教るとり人どほさることあ。益むん
 昌るまどあに。分限者と云大家と号。持て長
 長者と云そ。己と增長る一りれば貧乏
 人と見ると死ハ虫虻よりも劣り一ごとく。半錢

貧乏神記

中ノ三

人魚伝説



人魚伝説
 人魚の
 伝説
 人魚の
 伝説



人魚伝説

中

借らぬ者よさへ嘗^{あつ}辱^せりける言^{こと}葉^はをいご^い人を
 見^み下^{した}と古^{ふる}長^{なが}よ我^{われ}の旧^{ふる}く齒^はがみをを^をし。
 富^{とみ}貴^{たか}よ仇^{あだ}をいぬのど。さめぐ^{さめぐ}不^ふ吉^{きち}をめ^めらせど。
 のきらと守^{まも}護^ごる福^{ふく}神^{しん}多^{おほ}く貧^{ひん}乏^{ぼう}神^{しん}へこそ一^{ひと}人^り
 如何^{いか}で敵^{てき}當^あとるる^るに無^む念^{ねん}のあぶ^あしを^をぬ^ぬけり
 つ免^{めん}時^{とき}世^よの来^きるを待^{まち}うちよも。世^よまたのり^りた貧^{ひん}
 乏^{ぼう}の芳^{よし}切^きしよ告^つおのり。是^{こゝろ}年月^{げんげつ}の吾^{われ}胸^{むね}中^{ちゆう}におく^く
 らよ立^たく知^しら^らしる。其^{その}大^{おほ}望^{のぞ}の甲^か変^へありて数^{かず}多^{おほ}の

貧^{ひん}性^{せい}らる^るを合^あせ近^{ちか}きよ旗^{はた}をる^るび^びりて彼^{かの}有^{あり}
 福^{ふく}のわつをらと。た^た一^{ひと}錢^{せん}よ借^かり破^{やぶ}す。此^{この}日^ひの本^{もと}を吾^{われ}
 こちの皆^{みな}貧^{ひん}國^{こく}と諸^{しよ}ともふ。うちこの如^{ごと}くあふぐ^ぐじ
 と。軍^{ぐん}議^ぎ專^{せん}ら最^{さい}中^{ちゆう}あま^まば。やど^どろく貧^{ひん}福^{ふく}亂^{らん}を
 發^{おこ}し。勝^{かち}員^{いん}とこ^こうつ時^{とき}きたき^きば。吾^{われ}の日^ひ頃^{ころ}の神^{しん}通^{つう}
 めて。い^いろ^ろかと^と富^{とみ}る福^{ふく}よと^と。黄^こ金^{ごん}と泡^{あは}を吐^えき^きし
 味^{あじ}方^{かた}よ^よあ^あさん^{さん}の^の変^へ定^{ぢやう}せり。其^{その}合^あ戦^{せん}の懸^{かけ}引^ひと^と
 伊^い豆^{ぢゆう}團^{だん}扇^{せん}の貧^{ひん}志^しめ^めつ^つよ^よて汝^{なんぢ}の^の見^み物^{ぶつ}の^のさ^さす^す。

君おご軍の次第よあり。うちこそ借るべしとたも
 あるべし。その貧乏之の不断にして。米醬油ものあり
 むきべ。其とた否應いふことありき心得くるる身上
 屋貧助とちるや汝も告る言あり。亦のよめての
 志めつ現せん。貧助さらぶくとて示さと思む
 不思議も。今まで在つる異形のすぐる。いぬまで
 ありつる共くうち。煙のごとくさへ亡て跡はうごつく
 這まる。虱をうりを残りり。け有様は貧助へたぐ

苦然とあたまをたて。狐も尻を仕らき。如く。あこり
 虚路と見回せば。いとも古む。微團扇ひとふるま
 そをよありけき。借の正しく告あり。彼貧術
 のうちこそある。いで扶こよ是を振その貧おくの
 合戦の次第さく。見聞さへ。とちつ
 うちこそ翻へ。一ありおひけば。不思議なる。いぬ
 ころと。身上が。貧術自在の風よふり。戯場の
 幽冥みること。身体空は停あがり。支中の月の

貧乏神言の結

コノヒ

うげのらと。天窓の障子もみれたこそよけき。むら
くくとぬけ出つ奇妙ことと云るがう。虚空
をるら不貧助へ何處ともあくとむゆたは。

作者 當時は世間の人借敷負て。つらう夜の

うちよ。近所とる人も知らさ。行方の分ら
ざるを夜披をせしとる談は時始るあとびり。

這首は亦。今宵福留屋長者清門の。お孫みる
よろこび又親類一屬よびつとひ。日出度ある盃

の。ぶらま回りに諷この。醒酔は六席は満ひとこ

舞も豆どりの。ちりまちましく。百千鳥。ちとせの鶴

と壽で能宵酔の。酒宴さへ此夜とともひ。火

まりの。今の満たるころるぐよ。いざは納盃さつがと。

衆そまきくふらとぬを昔首尾よくふる舞。こも景

て長者清門の笑。けお。客を外門はあかり出

仕舞を長壽郎。家僕婢よ云こ。火の用

あいのると残る。うしろなく氣をつけて。即たみの

其の深く酔ふはあつひともはかどりのくさるる。前後不覺に寐入とまをば折らうら一陣の清香の間に薫ト。脚音高く梳込み。人の未るとおぼすべ。長者清門ハ周章つ。何者多りと頑さの。おもともあつ。愧ともあつ。あつ。見まば不思議なる。満面こへく福く。頑は圓と頑中を冠り。錦のぬくろと背は肩黄金の提を携。竟然ととして立玉ふハ疑もみだ福神の大黒天まで在りま。

かどろを怖きて身に起し。頑を置まるとり付て。只ひれぬして言も出さば感伏をりてりる。福神微妙の以聲たりく善哉。長者清門。汝生得正直堅固。よして留としども負ることあつ。身を高ぶらむ。貧者と憐に積年。下と信ざる。又感する。尚あまのり。り。さるふよつて吾今汝が爲。十社の。と作る。慎る。是を聽聞とへ。とたをがら音。戯る。いと愛く。た。走。授。其。白。

一、寶を振舞て。二、賑を悦ぶ。三、等用十分に
 四、邪をいよふ。五、一統幸ひて。六、無心な越ぬ様
 七、情を施す。八、病の無ふ。九、子寶守り
 育て。十、で徳を弘く。去こ足踏ぶ。拍子をとる。
 担ふり上り踊りこまふ。長者、傍門へ是をみて心の
 うらゝ阿房らしく。亦可笑くも思へども笑と忍び
 て聴終り。怖怖も頭の上唯難有。一尊。一と。
 感拜る。一居る内。又彼福神へ座。一玉。一謹然と

一、て作らる。一、今此處に姿形を現し。尚告かく
 べた一條あり。その外あらざ。先手より福者こそむ
 貧乏神。身の非をさむ。福を恨。不吉と起。一
 仇をささんと。寄と企あるといふ。貧乏神へのき
 一神。福德神の圓満。て吾等が組。一七福神。指荷
 妙見。歡喜てん。其余於多福。福助。近。な。き。福の
 のこと。崇め。尚。限り。な。た。福神の金銀多宝の光り。な
 怖。色。仇。を。さ。こと。も。る。り。し。近。属。上。の。貧。乏。之。の。た



金福軍記

立ちて注意を進め頻りと謀叛を告回る小何矢へ
 るた貧乏ども。兼て福者と争へど黄金で面をさら
 きてる兵員腹よあつを合せ世の貧性さうらそ
 福者を倒し金銀を時ちりさせんと企つは既に
 このこと隠る。係る近小貧福の大亂發るの
 支定せり然りと又とも瘦腕の貧乏共の爲こそ
 むきばたの億をることあるひと。當時の世上を
 渡さよ貧者へ多く福者の少く。歴々家業を爲

とくよく内どつをさぐる時天晴貧乏の味方ある
 者。十は八九あるむきば定て大軍催さる。たされば
 貧として謾らさざ。よれともむぐ神力合。福者の
 守護をさるべたあり。係る大亂起るといふも。して貧
 者の悪のこる。近末福者のその内も。利慾小
 まよひ。ことと謀り。人の痛をさへりみぎ。強慾非
 行ひる者。世上は多くある由る。よ。天帝誓
 こと禁め。かる時節とる。な。た。わ。の。吾等が

神かみかまてかま亂らんを止とどむことありんば何なにもも勝かち敗まひ分わけさまじまじまも
 又また大おほ平ひらよよいいららるる時ときあり。志こころろろふふ女に正ただ路ちよよしてして善よ行こ
 つつせせーー知しるる愛めで其その貧ひん福ふくのの舍くら戦せん也や。今いまよよららるるをを一ひとくく
 見みせせちちくくべべーー。後こう世せい人にんをを教きやう育いくるるをを端はたととももるるままじまをを
 ろろああららるるままじまもも。貧ひん福ふく衆しゆ議ぎ評ひやう定ぢやうあり。軍いのの懸かけ引ひ心こころふ
 ととぞぞ免めん世よのの人にん情ぢやうよよくくららぶぶべべーー。拙つたささ笑せう談だん戯ぎ編へんといいふふ
 用もちひひくく是こゝとと聞きととたたべべ。又また一いち助すけととももああららるるべべささありありとと天てん黒くろ
 神かみのの世よ時とき家け又また作さく者しやのの口くち述じゆつととりり交まてていいととるるががくくとと

密ひそににたたぬぬをを。長なが者しや清せい門もんへへ聞きここむむ又また思おもひひががららるるをを貧ひん福ふく
 のの軍いのの起おこるるふふ惱なごききつつ。ううのの福ふく神かみららちち向むかひひいいととああららるるをを
 神かみ勅ちやくよよちちととろろささ入いりり。貧ひん富ふのの動どう亂らんとと見みををべべたたとと
 ののここちちああららるる如い何なにあるある術じゆつよよてて何なにとと又また行ゆくくのの戦せんとと見みららるるやや。
 唯ただ希まれくくババ戦せん場ばうはは趣しゆ方ほうとと喻よととああららるる。いいふふをを福ふくトトん
 悲かなづづききてて其その義ぎままかかららいいてていいららるるをを一ひとくくべべーー。即すなはちち汝にはは授まけけるる富ふ有あり
 とと云いつつ錦にしん囊ふくろののううちちああららるるもも錦にしんのの童わらわ衣ぎ結むすつつけけしし。とと
 ちちららるるここししたた位ゐをを出いすす。何なにのの毛けもも分わかららなないいとと

惣金色の義とより出莞余とる一々宜入ふ。
 夫の両品の神宝へ隠笠隠義とる。凡俗は知ら
 色一實具まで是を著して往とたへ凡人の目小
 見回ることあり。雨露へりとなり水火をふせだ。四
 時の季候の暑寒を不覺天地自在は飛行食。
 不思議稀代の空より則ち是を著るとた忿心ち
 雲は舞トつ。宙を走りて行うちよ。必止るところ
 あるべし。そきこそ福者の本城をまじは心をまづめて

見聞まべし。且此包の内あるは歲月豆下ふふ
 なる依の米を蒸する物みて一日一粒食まる時ハ喰
 又飢るといふことあり。已上三種の神寶を今より
 女は授べし。金貨福兩軍数日を登て動丸納る時
 いふ六再度の出現るまこととる。多々疑ふことあり
 きと。余一たやふと其終は飄然として立玉ひ。
 大黒柱の上より。神棚へあそいりこあふ長き信
 門ハ良志を一感拜みして身を平伏し。いと在

づゝと神勅しんちやくの枕まくらにみまじり告つげふ姿すがたに米こめの包つとと表うら
 と笠かさ現あらわ然しかと一ひとつらひりまじりよしく信心しんしん所ところよめ
 いと不思議ふしぎ其その身をみを發あこしつ。彼かの表うら笠かさをま着まると
 見みる。包つとを懷くわい中ちゆうにあんと思おもへば不思議ふしぎの座ざ中ちゆうの
 傍たもとりあり。異い香かう薰くんトて雲くもを起たし。長ちやう者た侍しやく門もんをい
 だぐ如ごとく。飄ひやく々く然しかと停と止とり其そのあゝ虚空こくうを走とる
 こと。蘇そ由ぶが馬うまでも中ちゆうにあらふ。あよぶぬこと感かんトつ。我われ
 何なん万里まちとゞむと不ふ慮りょとある所ところありて長ちやう者た侍しやく

門かどの空そら中ちゆうより。下げ界がい遙とほく見み渡わたせむ。城しろ廓くわくは表うら然しかと
 尾おをさるゝ。関せき門もん玉ぎよく殿でん目めを驚おどろす。金きん銀ぎん珠しゆ玉ぎよくとちり
 をめて表うら麗れい莊じやう嚴げんいゝところ。帝たい釋しやく天てんよりと
 聞きく。月つき宮みや殿でんもかくやうと只ただ憫あはれをありまへり。
 あとみ隈かみ多く見みる所ところは錦にしんの吹ふ貫くわん綾あやの旗はた黄わう金きん
 又またまじり也なり馬うま印いん。其その外ほか神かみ物もの奇き羅らを飾かざり。天てん守しゆ櫓ろの
 紅くわうの定じやう紋もん絳じやうなる幕まくらと連つらひ。嵐あらしよりく。扇あふがんと。
 靡なむむと有あり様さま。あひのむと左右さゆうの手てをとりちり。

是去そ嚮み告ありし。彼福方の本城あるべし。いで
眼を止る其次第。見物せんと安座くこ。のこづま
のんぞ居こりらる。

このころ。たんのこころ。
此處へ書肆出る。とふざらしく。いよ是也。

いんぶく。あやがら。
貧福の大合戦のたぶらりく。さよう引

貧乏福軍記初編卷之中終

